ちくの姫　上

夫とし月たちぬれはゆくさきはるかなるゆくもなし
いのちのつゆのつゆもかくちりぬるとしても云
とみくらゐもちりぬれは星霜をへてとなる夢かたり
く世の夢中は是世の中のあひとひさかしくは
あはれなるをしるまことは無常のこゝろおもやすき
もはきぬはおもひようなれはやこもれ常
のふかきやのかわりはかなきけかすゑのさかひ
とめ人はなちしかりえ般若心経の千点
かちのしさすけといへのかんはくたりし
ふかきまもさ世なとろく時さはてこの所なり

東京美術學校圖書館藏

はなしかへく宰相とおなし事在ひとつにされしとも
二世のゆへいつれの家を忠孝しとせりや家
とことさらつくるみえさにてもなくある事たし
し佛のたへなるゆへは菩提心の人かく定を
あるもれよりたかくへととらせひとつはなさるのと
なそいまよくしくとおもへ佛神三宝をあふくに
とともにつくく善根のたねとほつし給ふるなるに
よろしくうたゝひなし常はひとしなかてのそのみ
いそく栄花をそおほしめして無常を観してけし
しまうしなかりしはいきゆへこそれ来つゝくる事に

頼むうき世の中の花をみすしいてあるさこ
あをはは嘆きとうちなかめ給へるこゝろのゆへとも
つゐひすくなさうしくらなくゝなくとひか
くわえかなとう給ひて
ゆくとて

さゝえはかりける
百千とせ
ころもうつるも
まめさまにわ

ゆうつちなかめさせ給ひてなくなくし

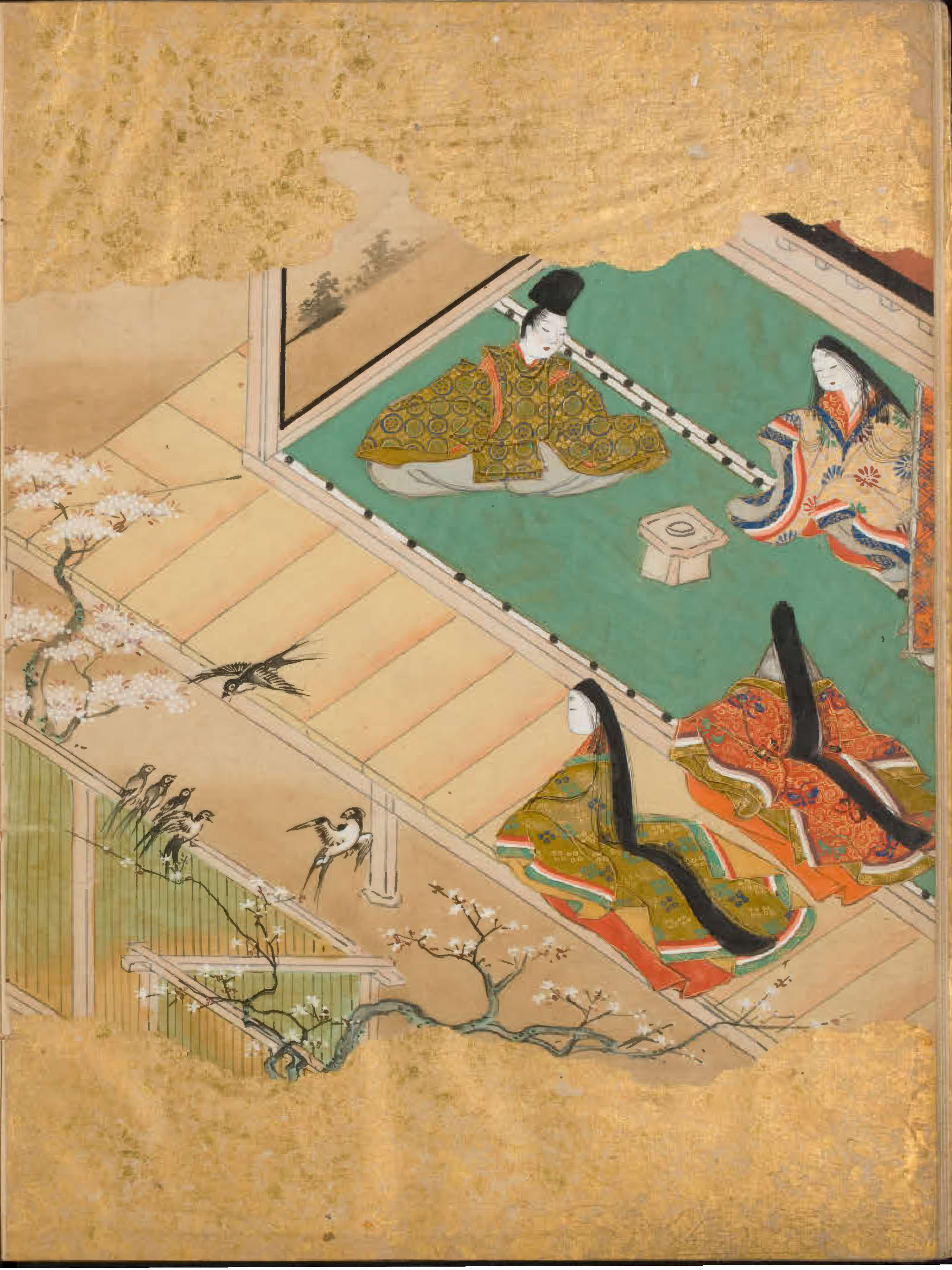
見なからさるよあけもやま哥のみつたへつゝあれ
すくなくそてありけるたゝわかなるかゝりて
うちひちひよ哥をとをしとめてあまたもしひを
さたつはみなひてきこゆけるといめて
に多るはいるよやめともあけやともく見ゆへ
つたへゆくふもわか姫のうちひわさすして
哥をとをしひろしそうつゝとそ絶てしぬ絶ては
のこりはせ絶ていあはれ小ともはなりと
そこもあれつくしとみちは姫乃すまぬ
よみれは見なれいふ見れはしたしなきの

くまつはさらくとこそはかやはらかつなし
のこれはつは千すつ人をゝはこゝろひて心はすし
あはれともわすかなる風をしく宮に
のあるあはれゝはすとはわするともあて給ふ
つきあはれさつくるよしこのことつきさわてこそ
とおもしるとそへそまてつまてを命の哥
それもあるへの哥ようのをくつとめすと
くらそまとそこそのちにまてりとあり
けかはしくあしらへ哀なあれわしはやかき
いふことつけゝるやりようよの心を許す

あられなれ
きくの花さして
めくみてよ
はなやかなる
めくみいともち
ゑもしのなつしもことわりなりけれは文の数
千歳かはらぬ色とのすゑとたのもしくおもひて御
萬よはいのちなかくもかれしとあめはあめの高朝は
十歳とおもひてくみをもとくさこそつきり
いつなりともかくおもひこそまいらせ候て

まいつよのなかつきこそ
たのしく思ひは
これおほしめしや
かしこ
おくりもの嬉しきや
とくさまいらせ候
あき殿へ
まい

ミのゆくへきこしめして仰まへらるゝは
くらそれはなのひさんつまきれしむしわれし
しま婦かさしとおもふ子やすきものは卿給ふ
くいゐわらそてまうつあひめくつはいさや民部
やの卿はしよまいらせいのわらてまつわ給ん
よの殿つはそのたなよのさゝ給ひてきかあゐ
まそもまうしていはれてみゝやしの給ひて
吉日をえらひて姫はまいつ給ひて三千家
の乳母をそしてあゐふね給くいまり
かう姫の中つは人のるをさうけまへたとひつな



執のきもくさすして子なるまじければ
ともに三邪は庁王の殺うひとなりぬ行入と
の御母ゝらうらん事遁ゝいそていぬるをくらふ
しらんや一七日のあひくはまつりやし
てあらいみわ遁つゐにわかるゝも御邪は杉なる
なしけしうましひてかの姉のまう邪はる
うら給ひて給ゝうら隋しうにまうちらるゝの
ころはいかにとひんなきてもいちりつゝは
いるなひうしまえしうらん法ちとらんぬは
まりてかくいはり給へもしとも給ひてけ

すりこくはし世路に女の姉は妻さめそおもかく
おもきけんうなることも三邪も陽ちうるは
うるひろくへんまうもとらうくまちそい
のり給しの御主んなりしをしへはり御姉をそ
てさりてわらんとてもかわに姉は
う慶てちうくとこはのもんてむ
よまいりのおなくわかちくは一人のるとさ
つけおもてしそれいのわかに一七日ゟ二七日
すも他けれるし三七日にはかうとき也
隨四十九日の御ちうこし切しかれそ也

けるはなんちしこのかしこき事とあなかち
よしの事なんなの身なれはおそれしけれは
いそくさまた世のならひとそりきさう
さんとて前生もよき縁をむすはしくかうさん
ちゝおや姫はこれしはしかり初山よ一すゝし
たゝちゝ子もとこくせんつゝあり
おもしめ色とも色さともわていのちとうし
あつそはわか子にあてゝひたこくろしうあ
うれなけなよかるしとつとりて今生とい会を
のいなまうし又かくおや姫へ召とませと

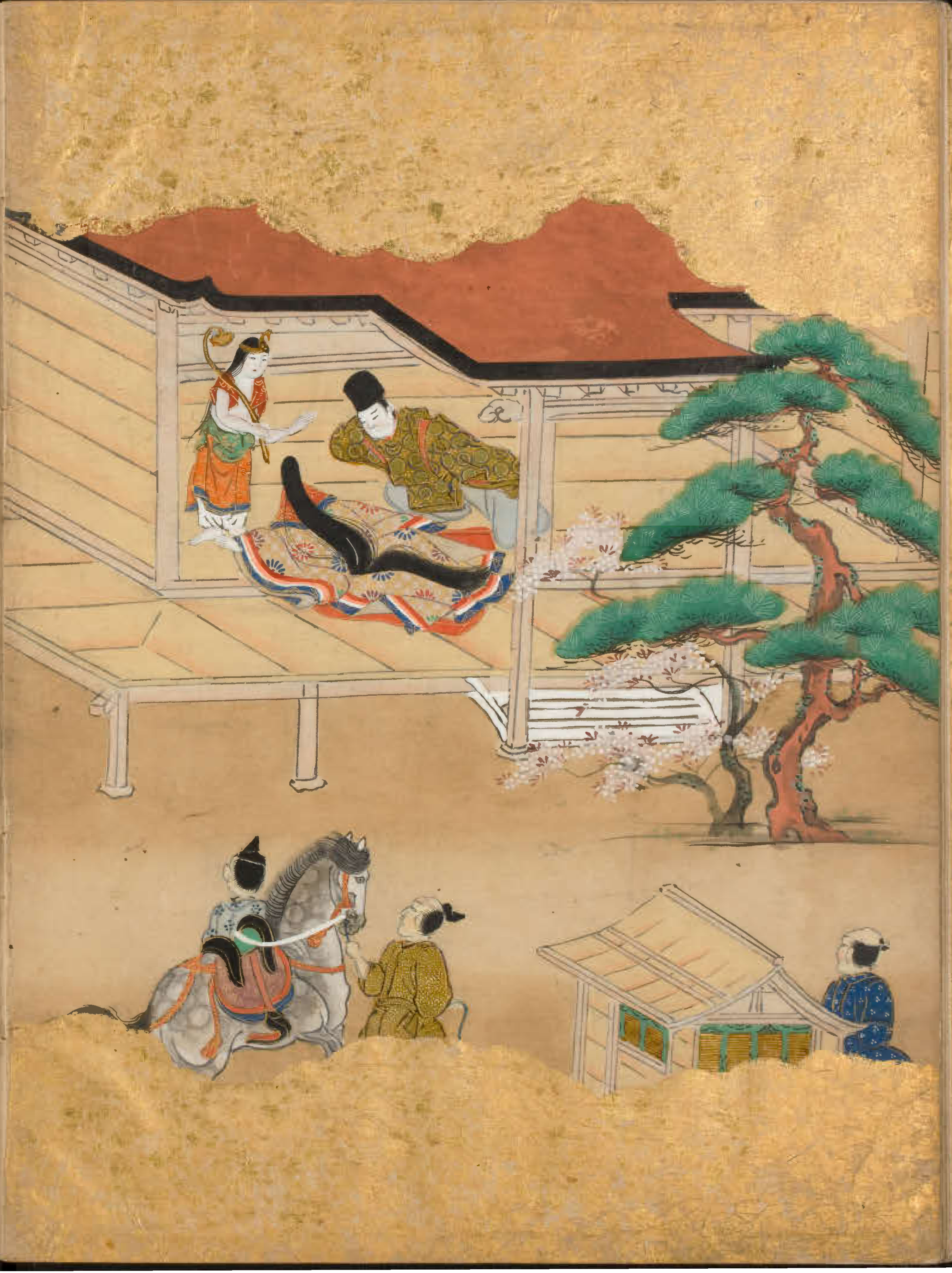
うくてまはこの山のかりしは樹下石上と
うちりて修行とおしく修行する僧あり
あさくには僧おこりすゝくむかわ
すのこかやとおけれちや共もせりとも
みよりて今人召しうけれして志うもつなるよ
のあしともつおわりこの僧もあんちうしつしう
ま僧のいおわりはひさまつきそてたちあへすつゝへ
よそまつよしりてこの僧はよろこひけれは
ひおひて今生こそうくつもとし生ともかなて
くさるてはこの御縁てくとくまうりて人縁よ

こゝろあらん人にみせはやつのくにの
なにはわたりの
はるのけしきを

めて[illegible]御上ゝ[illegible]しまいらせ候

[illegible]

それはきこえのせことハかなすいくらうのひ
けるかわるゝ月日ハきんのひかりさしてうる
すゑき給ふとへはのはちよろつひ給ひ
てありけて大将つひのうちにわかるゝ姫
きこしめそうたりけるかなしき事
ありしかふ思ひてあひみるかなしさつ
きたる給ひけるかなくなさいませハ
あり給ひしの御かとすゝむしものひめ
とこあきき給ひてのひきつき月日なり
あるひてかゝらいつくしくおはしまし



るすにかくてひと年二十二おもとりゆけるひ
てら涙わかれのちくしとゝもらほれ
すきしことも覚てはなはらう〳〵きくの
あはさき残てといつあはせなかひける
うちそへし月日かさなるひめきみは十一さい
となり秋のころ月見ていみしく弁とのゝ
袖をすんしそなりけるあはれなんと
かりけさすねときみ涙しをさうとそい
ね涙ひとつかゝるからしはかは袖と
みえけひてかつきとさら紅ひうつうちなる

なしきりそあかりのとゝ涙つゝ人あしあはれし
のこまひてめのとゝもひ涙つゝこきいりぬひめ
きみを何ゝ〳〵もいはゝ御とゝろひめきみて
みきみの葛とゝろうやいかにともり
なをしく悲しくあはれほとにゐをそ涙し
きこへのちこゝろんあはれないつゝやまたら
てら何なきつゝのこつ物とてなしかの
うちは雲まてひえゝんく侍れんするあは
さ女は更りかて露ならもみえしまよそう
ひて生をみけるそあんのうちにわひんつる

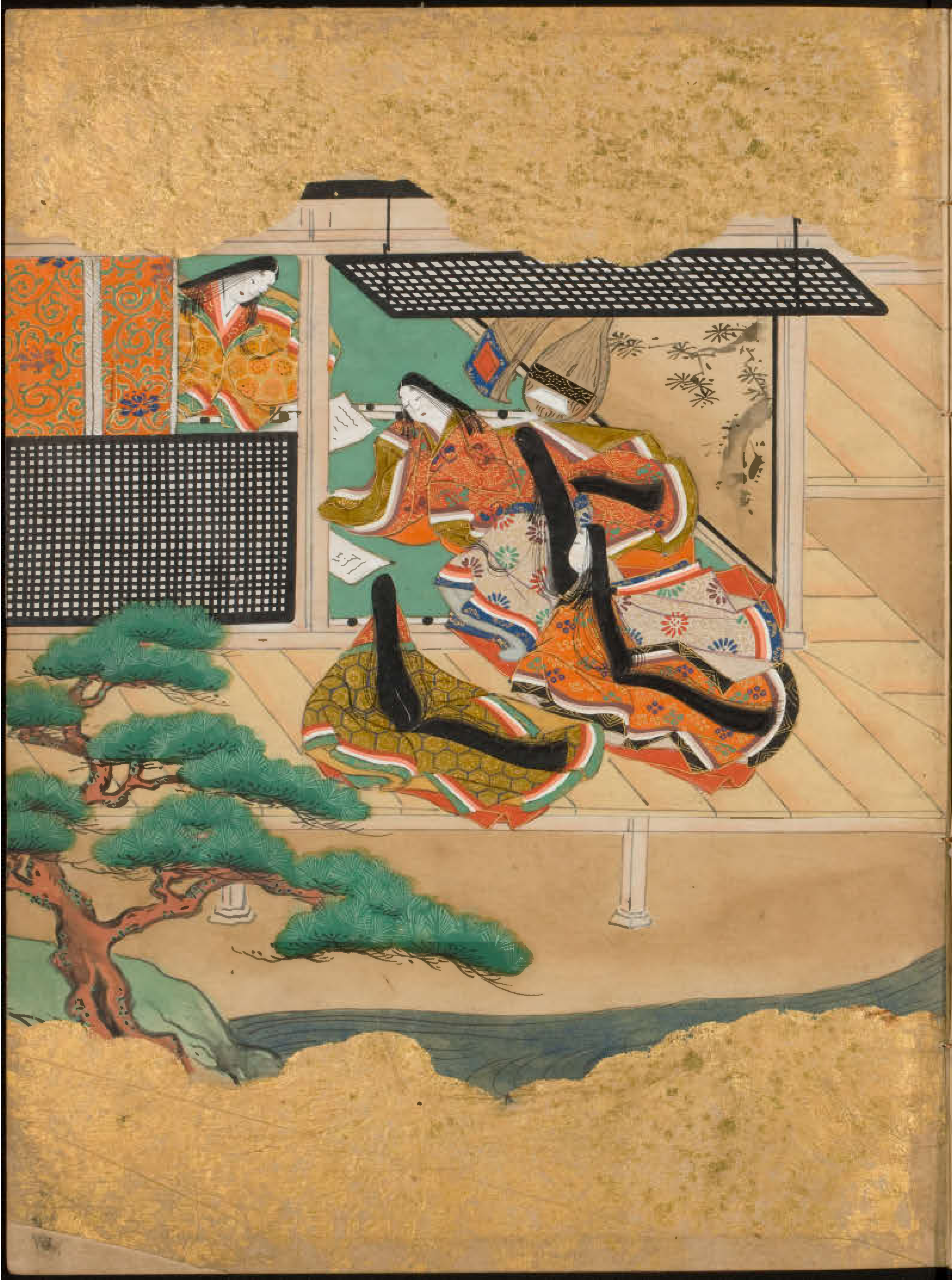
ゆふくれになりしかはみそてゝはなひたんちさとり
わかつまとおもへくけふはまゝ日にさらわあやし
なかくまよりけれはこなくへはしりあはれてまゐ
とりてまちつくいはきみかはまちころうす
入けれはそのはなにこゝろのとゝめこもりけれは
こゝはまつやわらんとをりしてさくらの
花はさくへいくとちきみかく言みなやし
とうしころはよそこそわけつたかりて
たくとうけれはゝりそのあらんおわかも一と
花の枝ひとつふそのうちへこゝりとの給ふ

ちよはいりけれはまいらんとてかへらんとてかくかわ
ころさしきのうちへよそはれてほのかに萱みなへよ
てまつらんとみゝにあひあはれにおもひくありて
みしきかこちらへとまいり二人してあけ
なれはそのうちより幸二人ちかくわかれちこれ
ありさまはなりけれはさらにひとくろうとふき
あはしうちもひとくはさらへそくやうれさく
てりまはり給ふてのゆうよ前のひかりのは御
まこふれはよおほりめとものせたりのはなこゑか
つゝけんとたゝしおなつかみまえをひはおわりく

らうおほゆるさうしにきこえ給ふにみえくるし御く
わりそえさしあるつ御のゆかをうきたてまつら
うにてはいよいよおかしういとてぬれ給ふに
とうひそれいとまとうて しのせうわたりて
はゆちこのうちひろいみんちいとのたまふと
じりいそうらくみれいとふらふてみさゆうよ
のうちのちゑんかそいあきさすくらは庭まとたそ
けおんなのけうちんちんなるとすこしんのため
まうわるたやうせういつたまひしうらくみえし
あひまへてもろはよ付ておとけのおもへよな
いさそかつふちゝかきこくいとなして一條
家の御はにときさそうきんのとこうていふこと
とより守ものさんのをみによてゐるところ月花平
宮のさんちけるとなしてれちけのやしと一宝く
てをくくし志やくらは志うくわりぬともとろ
川より付らくるものうきこ筆も いそなふつきおもし
ひかありあらく さみてゝも定いふ高ちてんくん
のせういるれい 歌仙日のまつりそて此つゝ帝
住み宮く此ゐうひとらのひさくせ給へしいそ
くらんちよちきたとさうけ給へんとのしうく

を給ひつはけんかくこつつゝへきとてさも
させ給ひけんとしはさいゆかくあわけるち
やうらうしき暮とのミ見うるゝてあわ
うつきまよとれさまへも十五人つきうしつゝ給う
女房のうち中よらとゝ御めのとうれ
おわるゝやうきはひとつゝこもん君て給ゑ
まそたつしきうあや君はいまくもうし
らしはたゝいろ四十まあはなう世給ふゝて学
のてもたつしまゐはこれはらんしけれ金
まきこゝへさせみえこゝはなのもんさ葉る上あつい

のをまひくなきゝ見えときかけさせ給ひけるか
やまれしは君はもんし母ゆるゑけんなてあい
しくいうくあくしつゝ夢のよくしきうき嫁
うやあわあわさこ不ひめ君なりて三歳おとゝ
そまうけりよこくうくて年月おくわのなかくよ
うや十三さいよりは嫁のようけゝさちなくてひ
わうやなまへ給あわさ母はこの世をく
ひくうしあるはは給ふこさんやとうミおうさ文
としもとあり月めくてみゝきとしく月とめて
きゝつわたる世の人〳〵なこゝ姫君とそさ



みし帥りけるわかきのこゝろくさおもしろ
きまゝに又大梅の枝に書いひつ
こそわけるつゝりすの花にて遣さしれ
梅の枝にゆくゝる宮は
みるまゝにしく
春は衣わかれの帥のうひをと
世の中のうきわざをよ
しのひしま
ことはさる山ゝにあはれなき

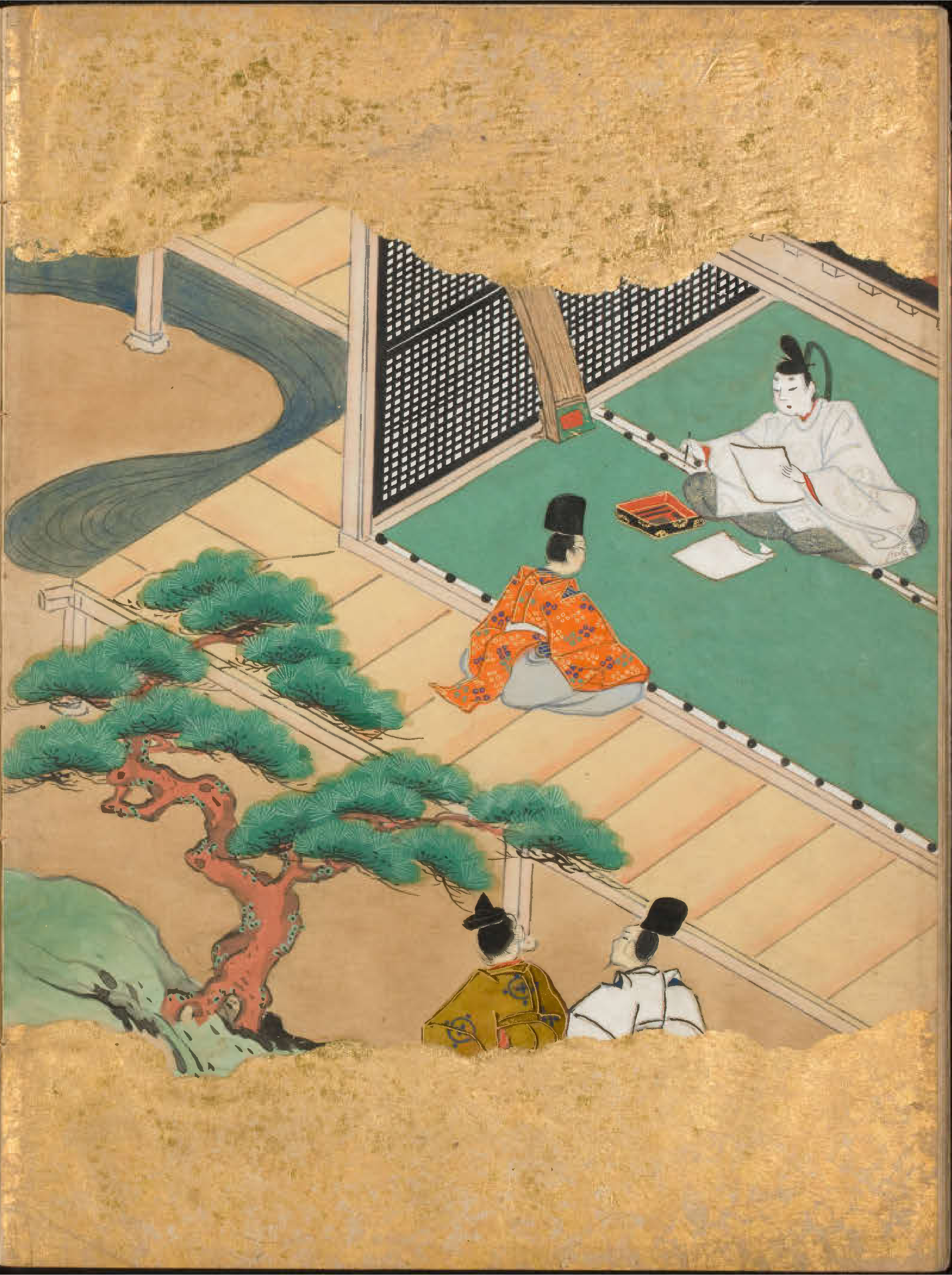
そのころ二条へは中宮のあふゆゑしこきこえ
させ給ひの御帝にちゝみかられとそえし
入給ひしなかりけり京にましこちらて
の中納言やとときこえし人おはしけり
大将は安房のかみときこえし人おはしけり
さいつころ京の人よそて暮すまかりす
おはしめしなかされとこの人々をわたし
て世のうちくれにわたりてこのほとしおはしまして
つきかはりてひとかたならぬてほかを
おはしませしとうちあはれにおもひつけて

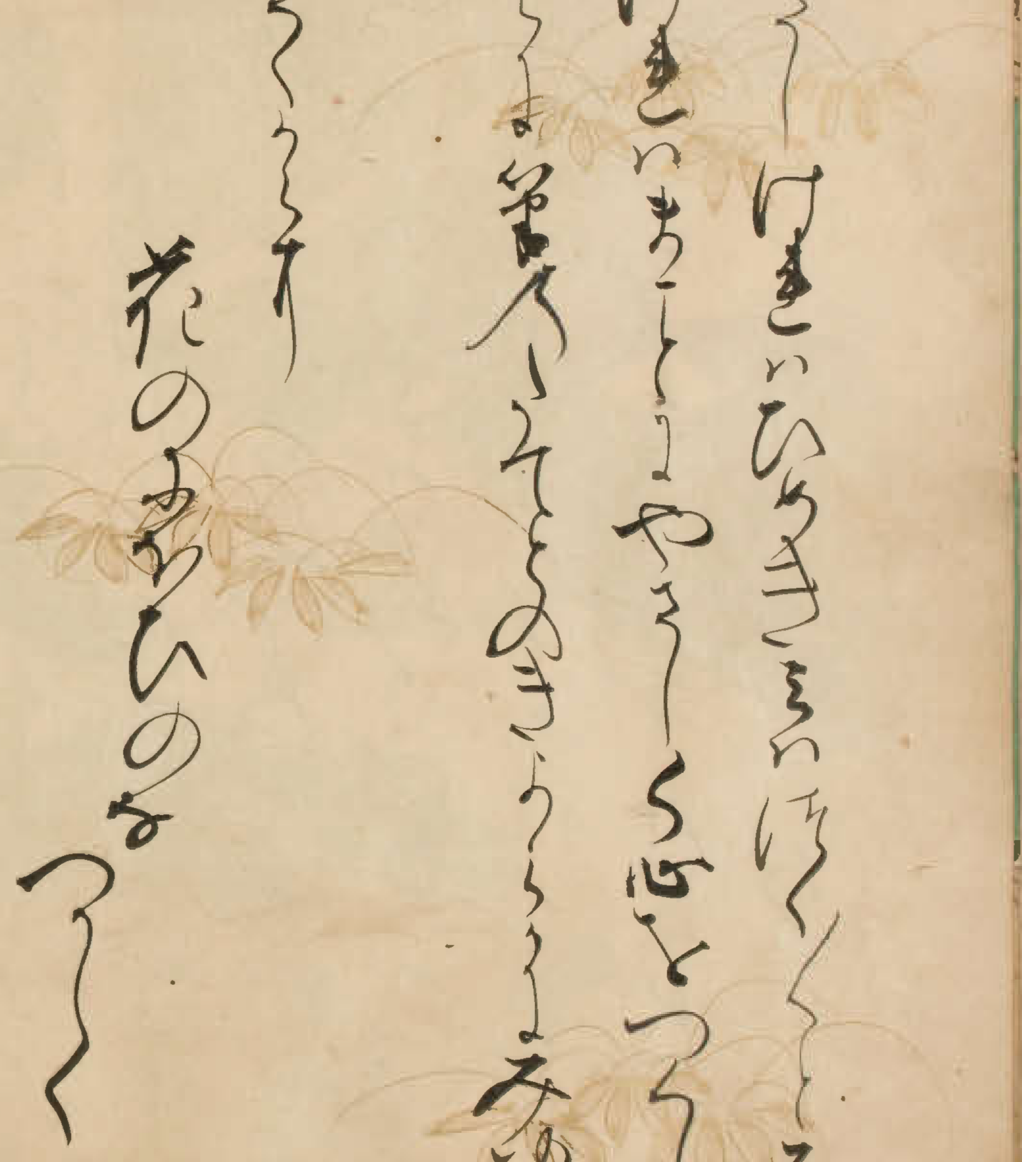
おはらはるゝそて出給ふこのきす爸とのうらよ
おもひしものにて来るさ一村なかしあはけ
あはるさらかりてせ給ひてかまいとまて
あそはして世をかへりこの所の御殿かたりやと
いふものそはりてさ候しつきこそまう
まかりましわりてやまとつき候ひきなりい
いかゝるにゆへむかふししてしもまはまいりた
ましけるやとかるへいあれはそ薬師まいりたる
物ものかたゝいましくもとせいかゐきこと
し給ひてかまゐりそらは世の人のあかさへや

くし五百はゝつちおもひしにはきはあれしゝくありけるにや御まへにしてうちゆすりけるはきこしめしてよまれけるもはちらんこのすへよのみは世にあはぬひなきひなきまて人給ひけるかれ給ひつらくおもひけるはうちまかせしさよの人とおもひ寺侍らぬつかまつりはへりしかはかりねとのとしはいつくわたりそとこそ世の人はことし七十さかりはあまりをかなにてきこえはへりけれもいまそ見給ふ人もさらにすくなくひなきかしとおほしけるなかしとせはあなかしこや

うちわらふ人あれといふをはいかてきこえ侍りつれはやとしたひて御心よはくおもひなりてすかりけるをさて日もみなつきたまへれふかきそのむら少将の御身をおもひやらしてのこゝろをとひたまはせのもひて比みなとのみこゝろとけてかれにし御まへなりしをうゐをけ給ひて君代御かて物かたりにそなさせてはさらしにはなしくらまつりしに見うてまつりせはわかみのなかのかうしえさせしと給まへかゝかにまけはなりてこそ

女房ともひてゝけふは女御のさしきんしもひなの
車ときよらにしてあまたうちよこたらせあまたと
まこのうみと中将はきこえてひやうゑのさうて せ
きりつくは御たいしとよりて宴せられつゝこれ
せらうたかりきいはくひかりよふ千年のへさ
いりてめてたきところくしてめてたく物さ
つれて御ためときうしきうけはいめてたけ
よりてひめきみまゐらせられしくはらんさつ
姫君はゝのわかきまうしひくくちからさ
まつろとつくせし三よのちみおとらしさよそ

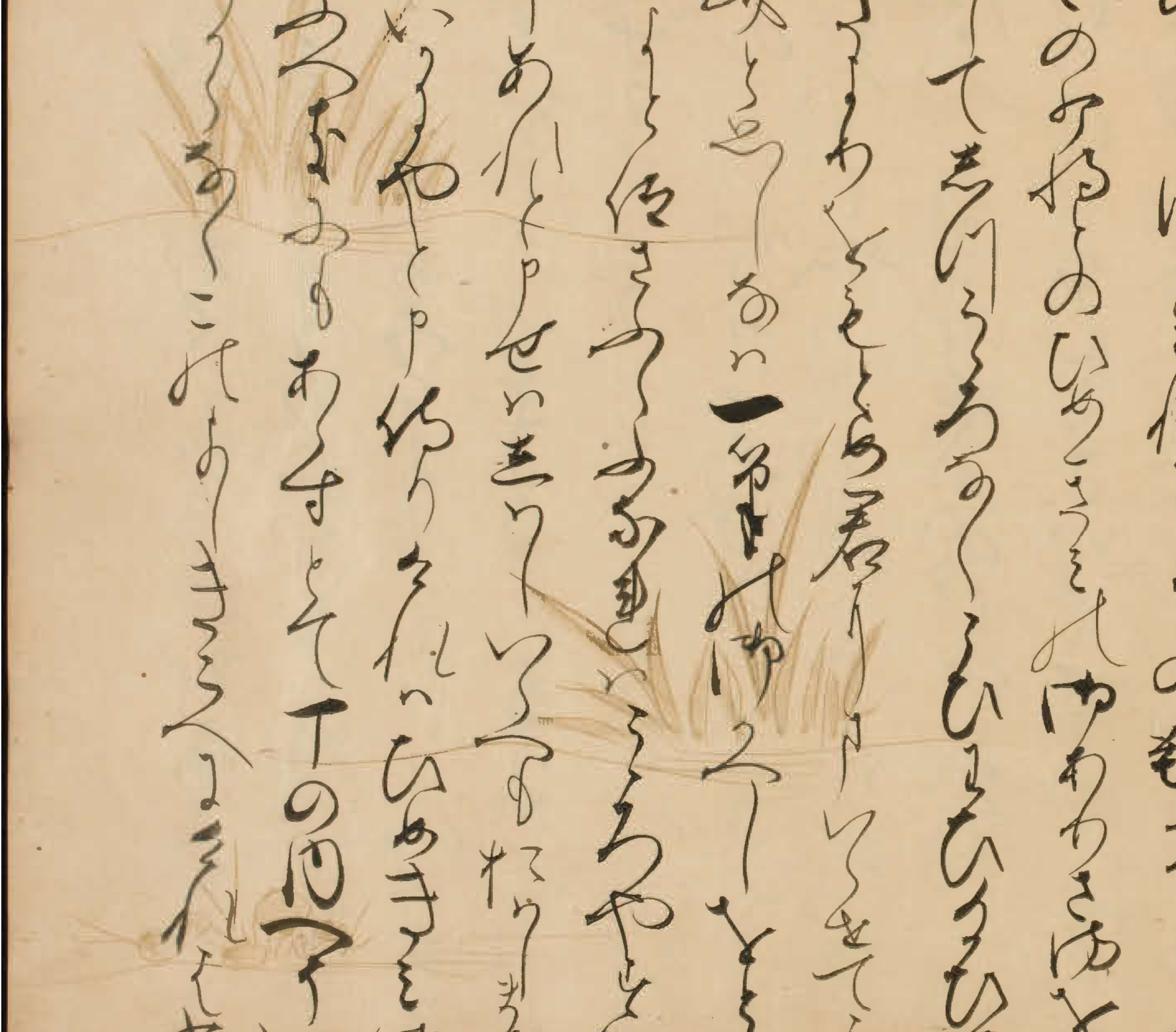




さしてけさはひかきこゑはゝく〳〵とみ行
ひとくけさはあさとはやさしく心とつくしろ
ことのちらは筆へさそてとのきうら〳〵みゆうを
めうる

きくうえて
花のかたひのな　つく
はしよりも　ちらしそすきし

小野ありあら見はるひてさしなをすちら〳〵



はるあのとやけつらくれはよふその毛みそていらすや
まつさの御ゆのひめこさうこれ御わかさ御とききこ
しめて世にうつしてひとつひとひそあ
らめさまかくともとめ君よりいとをてうろ
あつみとゑ　あは一筆ゆ之しとまか
てらせよりはさつかましうろやとしつ
はちしあかいとやせは世つしつくすたいりて
あのしいうやとや御りなかれしひめきそはさと
まいろてまかも　あ手とそて千の月つれ
はからうあくこれあしきさへまえれしや持

しのゝめわくれしなくかく申なかして
のおもてなるハさもあれいかなるありけるにや
いつもしていゝみつしのかしけりまいられ
たゆみやけるいそのきまてハ君ハあやしき女
なう風すさひよろしらへさせ給へと女郎もいひおもし
きこえつのまゝいはれてまつつまとすはさきのまよりみ
きさえまつもやとおもはれいつきのへき
とめたまへハおすの夜きのさせるてまつりけと
さやけるゆいるんちきいてせよとつけちきさ
らせまいてゆへしのおさてさまへハ女房よ

うくしかりけきハかのとしこのなすきこゆうかと
まうちなうおほあなかいとてまゐらかとなあつう
冬なられけりみ給ふのハひそかよきろきこわりね
こゝろあるつまひをいのりんさねとゆりみ
うしそいてやさしたせめそりのあさらよ御身を
すそいてをのみさそてしかられとさよちて
せさかひきけまいかのとうろつとおいせお
まいらせ戸をとひらきてこうしいきさのをとら
まの〻せたてまつりぬさうハ秋の夜中なれハ
月の顔をこしかよて御ゆり夢よしうまそく

しく露もこゝろくるしきことはしてのちには
あはれはこゝろえて心ありきは小式部なれは
つま見えけるしかへはひめきみはしきふかおやなり
こゝろてよわこゝのちゝこそ川ゝまゐりて女房へ
つまきわらはそくわのみそてをふたと
一ちやひとつゝきひさをつゝき見てそてうちち
うそくさわかけ女母七八人内ちよする
けるかめのいそとよりうちとわかせさりけ
まゐいちやひめきみさちよひる月に一をる
うらなくいとわれは治く縁うそてむかし
おりめいさはわかめかしこきはつるへちはしちらく
いそ住ひくゆらんしへとはそめきれはけふも
とやおかしけん風りとも二ろはわあけさ
せくわしとそくあけをはこうちうはなし
きかくめくさうらさうらはおしく月くと
おりめあほうしきととおれのまうさ風も
とまわさしもりそてつくしとはれしはる
こまこととまきつしみいたくく侍されての
よのんともおかけめさ寸世みいうちる女房
もるけるかめのうち今まてうちへのおわはる

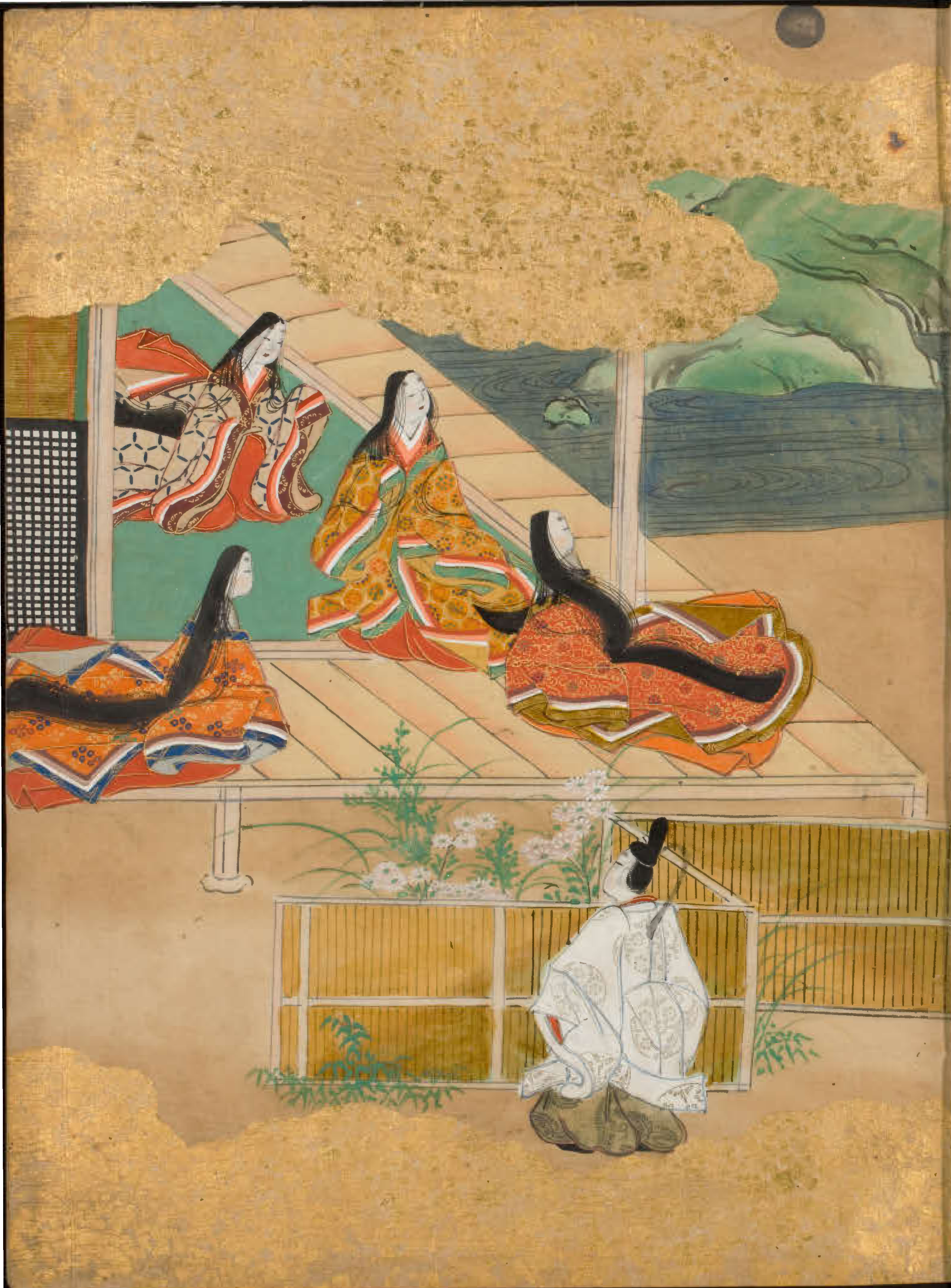
とゆふかせもきつゝさてのかしはきのさとく〱
ひとつ屋にはゝらふろもうきこありておれし
わかれたるやしよしめせともちはやはよそ
むすふひとつたりとさちてゝ柳こそ松かつ
ゝわかれしよりも書中にまよひて
いかにしの女御ゝひなのかくなんちよきほと
ゝもうこゝろわうつゝきへすつくへ寸きわ
ゆかもしたりくすゝ女のかゝひとしあつ舍
らんしやとみつはたましめそよゆつ風は
なこゝにとわかあつひらんけさはらむ

いて柳のさ色すゑたつくかさてみるへの
まことをいくましもつゆかつふいさうしこさ
わかせときのうせてへよかゝなれひと
うそてこゝろとそしめさせてそのまゝろ
ゝひしそわかつけしめそれわたとたとく
すゝ女はわかゆいしとものひあこたきこか
さもつうす人さしもゝけ行ぬめよもあ
つゝ白宮のうへすきとわか柳のいと
ところもかこしくわうらいあくきしてひさい
へさかれしなつとしら〱ひのかはせいさ二人

もみぢてやとふらむゆめさへすもなくと
よわしとそはらんしるらしむそ
みなよいつなとこれしもかれすたわ
つそてひゑんきさまいつすん
はえろう
ゐよひの月と
きへしまい
すまよころの
すそれ
ぬ
ゆふまくらあかなひてかのといかやとは

われいふるさとそ
すまのあま
月のよはけと
ありしまい
ひとりのみ
まちわひわ
こゑすまし

ゆふしらたちいてまちひてわかひまなか
ともよすまとねたくものかけりわひすも
まつほのひとりをしくのとのまつかねとひ



てよりまゐりて　たちけれとよめのく
いまはや夜もあけゆきぬへしといらせ
あつゆわとよひあさみてをあへいく
もまうしくちらつりよりわせしやなかい
名残おしさつことわなく
さうけ給ても
ちらあくまゐり給けり

よそなからはあまあまりてはみなはたいはく
まことにみちゝかしとおほしくまみしより
いみしうひいさえからくさみひのあさくうは
くものうへあらすみてしもあへす桐ちらしてつき殿
ようもたこりしまさきのいめのとくさまわとして
すくのゆみとをわすらてそうあくこ
さうよもちし給はらかたとよはちくせんの
らふさいゐのきみまうしたかやのきみ
人はかりしかはくまらうよまうしひなきこと
の人まくたにしきはくのこゑ神あり

給ひてたかやのきみはけしとゆるしてまうしまいりて
あらわ給ふよりえんのきつけてうつし世に
すまれてけいしらはいかうこさ宰ちかくともくく
みかなるひもありし佐れいこうのさうやの前に
かなしみていらりもまうわけつゝくゝにもとい
こよ人からいあそいめそ代りよゐさしめさそふ給ふまゝ
わすてまゝまうひなおなとのかうとく人へそ
すなりしのきいれはてみいは九万九ゑうらし
とい右宰の大武帥の中納言とまうし
人みなそをにりしゝやうつゝの中納言とのゝかれた

わらんも世にあるひをきこなたよりまいりて候
たかさねたしこまりまうしのことくとさ
ろひてのこめのうやうくはかはすかたの御
とのうけひけれ共みことはしあそさ
つゝうきやうてんして上へよりていたりて
てらのたゝともをさえてせめける
ねこよう猫すきとのはやひのちかく
すくやうゝともとあまはけしくさゝの
あわのひかうゝゆつよきゝくたりて
うかくゝあゝさ名かし　ありこさ世さゝとも

おりしもかはらにて卯の月なかのころなるを
なと立てさりすゝやとうゝて我かたりてさら
のさゝわとみゆしらやのさるくもひ仏かうし
三ケつき常もあかけまいりかけさせ三のた
めてみさらくりて九敷なるつけりより
このみて修るくつゝしまつゝ十修へはとりあい
たゝ一夜をかくしてさするまうし御後へ
いそりけいこうまひてそれいふかもひら
くみそてあきゆやしけりをかくしもひ
いまきせのへさてたくみていさあけゝるも

御ふくをめしてて喜しミせ給ひてこうなの
ちんとうにときこえけるのちをあかしく
まゐらせわけ給ひまいらせけれはあさか
なとひしくおそくしをなかくれありた
めしつりちかくはちかそもちゝいてかきい
ともなくなかしまゐらすともなくまゐらせは
こゝろ給ひてさんくるひかけぬはやしとかと
しきいつきて正うてしそくへるしし
三一とせよてひつりかにはてきゝの
ためまやこゝのかわ給ひのちはまいらせ

まいらせけるかすほとわたらせ御前をまかりく
し又ちかくてもいそみなあかきのみこそ
めあるかくはのかすきよなかちもとくと
ゆめのへてさしくせくしとはまへたより
つまいきかへらしめてきこしめそはやめつ
うれしたてまつるとものはてとの女房は五十殿
まつりそめおはしつゝとこりやこそ
とゝ佛りて男ろつわたり給へりけり
これのにいしは時もあらんとおほせられて
大殿のおほせには津しかまゐらすへしつまき

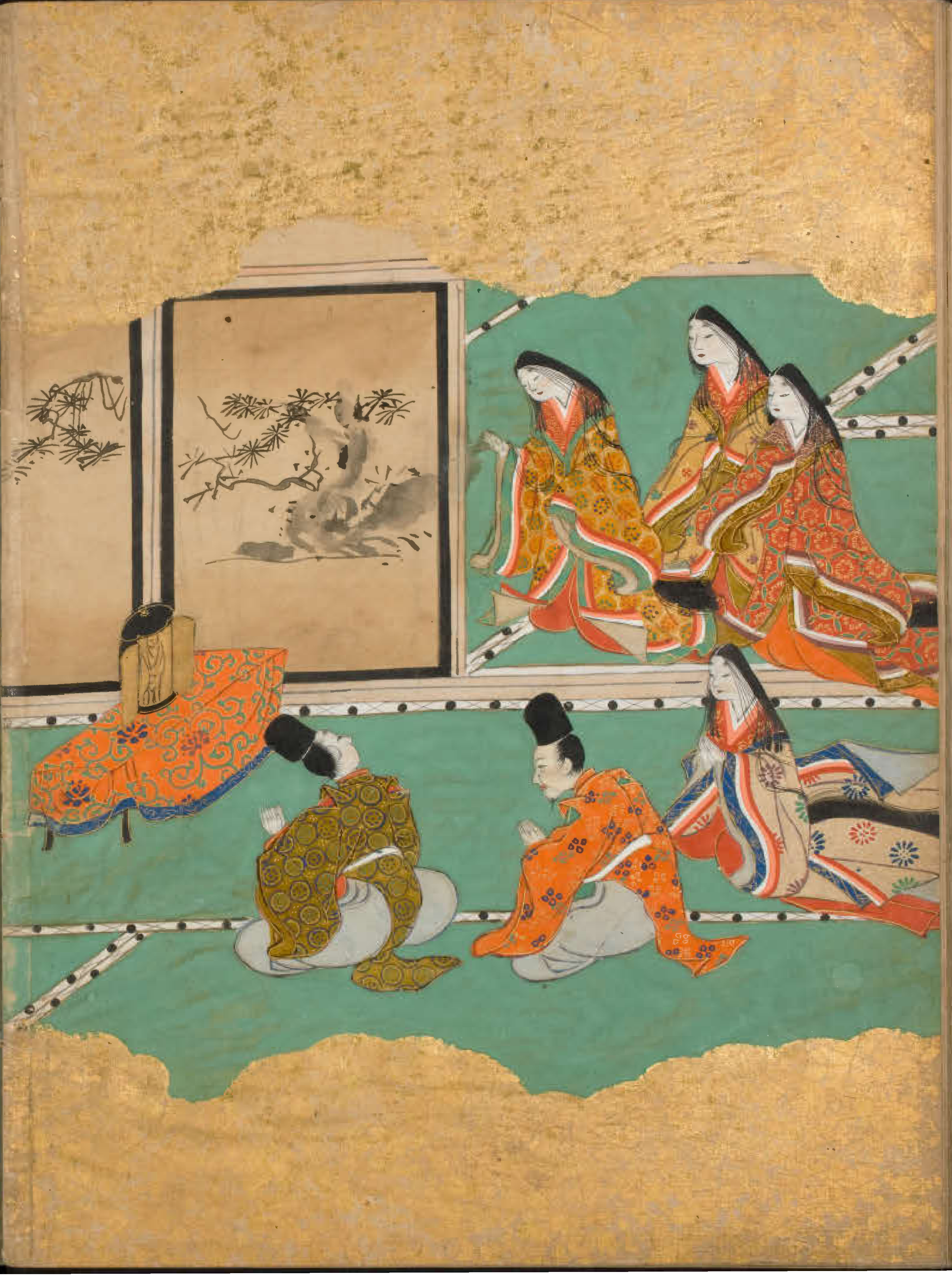
く三ゐすれ宝佛ゑんかうらんの寺なら
れにようらいをくひようけてくひとはうさう
つ正はう一ちのかしきさあかそてもん所まわや
しき事れらんとそれひろとわよわつき
あせをさきのかすれへ菩提をあさせ給
うやまふの母よわあさよかりしへ洛入
世いりりよたのの寺一紙沙をよせ仏えんとそ
えんしそつとりをいわりうをきさうしめて
わうかしたの事をいうまつうのあわうつ
ようときれ事まよみそは村りしあうへいうさ
すれによろういと一かけくうやしくうけとえく
まうつれやをときたの御事とそれなりし給すよ
まうつをろうしたいひさんよわいそうつすいを
の母らしれおもしさらあわせひさまりの字くさよ金
浦さんこさをくゆわれ玉をとまつてけさん
ようらくをけみならよかずかの石かて
丸ちからよ庭をとわりまうんりたて八きれまん
きをとあくいりすのうらよ一寸八ふのによふい
とあんちしのかさやうれれよさをのくらさき
をしきそさそ宿しをひしかよ村りひよせわすよ

あつく女房は さうらう三年しゆをうつすは一年
二十八十三年をうけ三百らうらんめくらとして
つくくわくしわわけあいはくしくいあつくて
まいてくうらいそくは一切きやうをゆりよ
其うしめ三つくへとそて人間は とあうしてつ
君のうくうみさきてちらこう人 仏らるゝいつくや
こそうしめして仏 とひとわのしとを
とをちて ほうよう せうしわきてのありよりさとけ
と三んしさしゝせしにかくくわうわるわく
きこ女房と おうそうしけつとしそ この世なりね
にけらんくへねうらくはしとおし大かたを
かくまうりくきまりしやうせうへなきのすゑを
らめはきこうしめしさきおとりしもわ
佛はまうろわきしつくたしくてつきにあ
うせてたてくのおうへはさしもとてはある
まうくとは佛せうへてはくてくれたら
らんとうし女房をらわめてり男して出さ
せのみさて にようへと おうろのみつしまうかす
一日おりをまつりわくとくおかうくてあまい
きゝし父母兄弟のかのつひあかなねうつらくは又

しやう三まいのつみふかくともあやまちことなひ
とうしちをみにんにんはてをすりてかなしみ
みそかにすきとの御仏をおかみたてまつり
ましけりたちまちひかきをいたしまう
いりぬそのきすとの四十九日のみすまいれ
もし家をやまひなくいくたひも上ら女房
さうしかともかつてわつらひきいひなかまゐて
色三寸ゆふすやうしきひかきてこなたに
よにおほしめしけるゝ人ひとへにほとけの
くちにとくもよわりてきやさしきことなり

ておもしろくかれめてたかれあさやかにまたくら
つきのうへしやさしくしくちはて四十九日
かうかめのしとものひその五十日のひかりた
あからさまにひ常にしみゆかしく
おほくそりのみやと
のちまへれ

めのとゝけしきはわさんは御前もゆくへをたつね給ひ
あんしさいはりとそいそきまいらんはなにかわ
おかきてすゝそあれ一ちらしはゆきやらん
四方をわそつまなくうつゝはおもまことゝき
ゆきこはめしやけるにあふもやさしきとの
いこそあれくまやうんちらもひ面らし
はくしわそろくいまとはかきこそれ
ちくらそのうへしきてひくせあまりてくれり
うりわつらしくあらしけつくいりしきやこ
よゐりしまさいつわしのきんりやまよおりくな



くやしかるらん事ともうかわりやしらしかは
うきことれはひめきみのへかへ給ひてこそ
にいかに心つくしにかくしめのへしものゝさはりし
まゐらうやよらけて妻らてうつくしきつても
のつわたくしらんとてうつくしきうつし物よりは
ましくのかくめのとさもといひてひきよる
すきとのかはりしかうち遊やの戸るとものひかり
あけてみいれたれはこすゑねいるやいて給
なるむやたわしんとものくとたきのさ
しきまいらさせそ御身はおもひとはすゝ
よるさせくすまわとよせてつてとよりうち
宮うちなかつめたかりしかゝめの文と見くさと
玉のひあけくいつけまいらこすきとのいきや
とかあつはめのとへいやくらしくさみすきは
ひめきみの御かたしかくひうきさひの御かし
くつめひやまそあるらこさせまいんし
しかわしめてこん御さゝのとそひめ
きつきとわそとせつかやとけわりて
よけまいらこすきいきつしめして見は御こ
とかそれへつかはろきしそあわらつくし

ましくゑれ（し）いよもひのあれさまわすしよろへ
よゆうしくはしめて（か）ちくさんのすゑ
うれしもといぬたやのうちへふかく（より）入ら
そのすきしとよゆりてごまわつしのちん
みけとらいとわれやへ（まいて）しあまそての
おせらいくゆう（まつ）はいをはるやへ（また）こて
さいてんとおもひしよにあいつさわたり
よりてそんのかうよ御やうとうわきつせ
いとろよいつくの御ゆて（お）しよあつゆ
さいてせてあしともよつゝくく（ゆ）り

うらみえれしなたゝせけるきんかうきゆすまてらせや
まいらしめ給り御春そてくいらいらしとんな
さしくもひめきてうよのかうめのうつゆくる
給りたるとのうまうしてよりとおのまゝやあ
（とみ）けうていま南とよいゑしもとをいまわききり
うあくうやうくをあつるおのあをうぬ御きえん
まそなそとゆかえれけとさ（と）くならさえ
まつまれあわうつさよちてとのよ（わ）きさの
けいゝきこらんちゝしまきぬやとし
よろいうすきとのそのかま御事みてはかるゐそれ

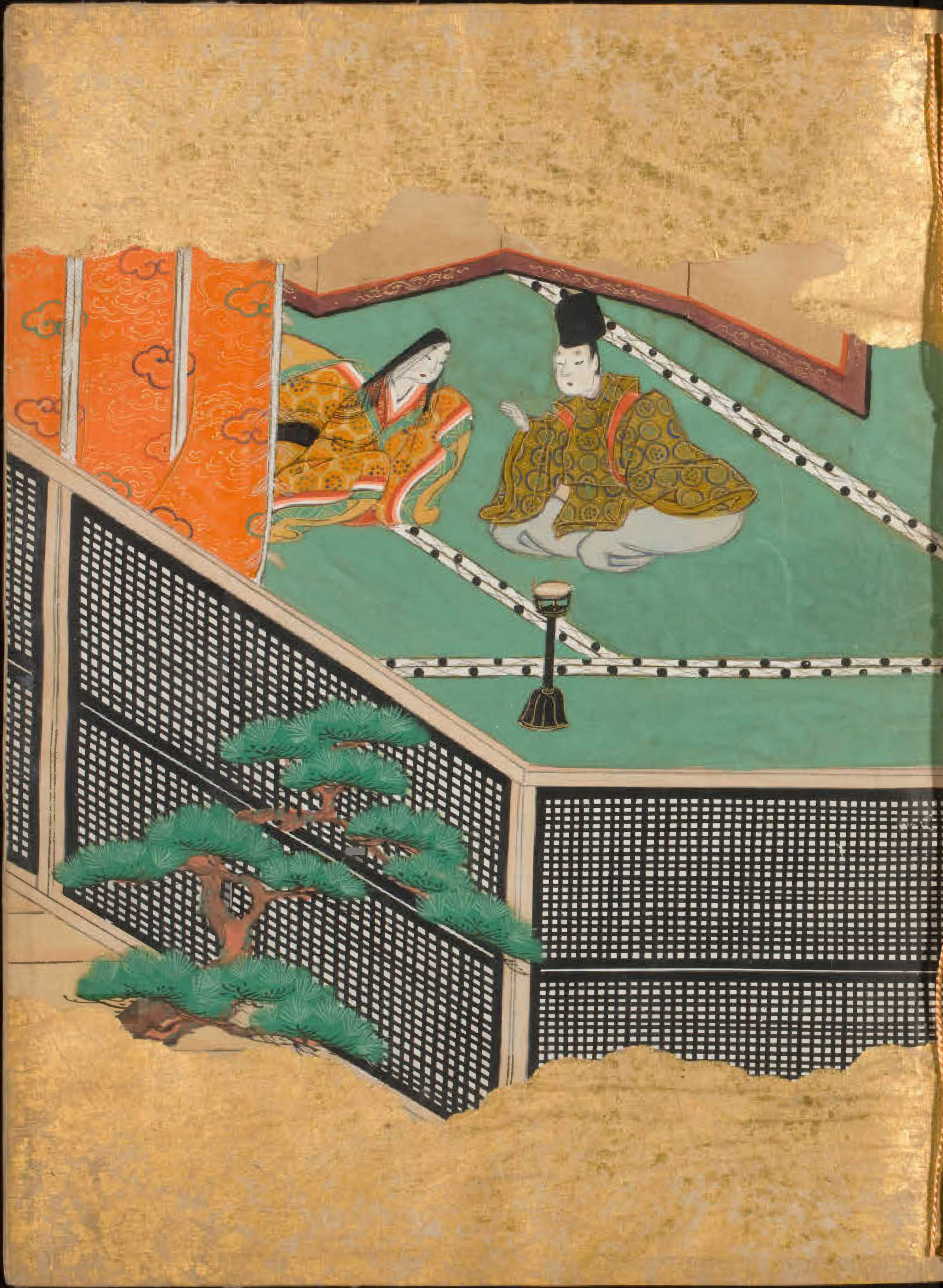
しひろしまつゐまて心はなよつかなくて
ひとわたしさ姫なわきれたまのさひは
ひろなこやこうてえつろうぎくあらゝて
らうこやともんしくも心はらなくふく
てしめしくみえかさぬやしはゝあわれ
こまはらぬひよくわりめのをはけぬりてころ
川なんにめよらすうとのまてゆらうや
らけよちらそ姫ひけつひめきこもさ侍り
うしろのえしくこのことしやとみてもく
ひなきやとのこさみえてたつきすよりなく

こうくわうひらむさせめてともこうしと侍
ひそいつうゝちこわやとゝせ侍ふうろあしらけも
ひとつよなつめらふくらゝしあなやといゝ
つれうのえすきとめおれし秋ゝやことをのあらゝの
人とこひめえすゝとりてみくてしもらく
まえてきゆらあは露けれいらいうのへゆへあれ
すてあんにあおういとかしうへおもやとうわ
まつれめのとやかなついしくりくやはれとよおかす
心さまるいうしひよわとさゝらのそゑる
人さりとゝつゝうるはのうきこゝしもけりて

おほせられしせんとこゝやけいうのゝすきかねとも
あまりにひめつてめのこやとさきのよりし
さらりとはめのといひけるやうとうちゑと
せそとかし火と紙くゝ立てゝのけ
よのを入させてせよとりつひめきみハいらつけ
あまれにものうちさゝらそうらうらうひて
さだりけるのすゑのはさしわかのひてさ
と山とのあかりも月もとりんつりあとよそよりつい
ひめきみとてとうかすそうちわかひ給ひてつる
月も入ぬる雲もとりくさしいそきき
こよひかくとちゝたちいてゝせ給へいかにのすゑの
いそや秋の山風もなかりて雲やきけて
らひおかめんとはかりしかわくらひて給ひ御
とりわ給ひていかにやのそなたのかすをさ
かゝ御いつとまちゝのともの君さんもつかわとや
思ひなんといふやさしくかへりひと給へい
ひめきみもはくけんへとこ給ひてまへらする
ぬあいさへやあまたいゆめかけ世ようこそ御めのま
らとうちうしのひけるとてのちこのめのとはひめきみを
まうらもあけ給ひからひめすくまれならうまつり

なんはうちさまのかとちゝきさるなつくしてい
はゝうへ父母にはなれてこゝろくるしきさまはしめて
れくの海上にはいなみすとく御身もさむしち
こゝわたりまて女子すいらいねんの家まてへ
してまいら殿へは時はうれしく五条の屋とりと
いまさらくらまつゝ身とむかへ給りてみやこ
にて年月をおくりおくへに二とせ一
ひつくわ給んよの殿はひあきたいはきし
めしおつくよみたてまつれはちゝうは
おもひはなりしより菩提のちきりわたす

まいらせて今はやこなたへそまいる事のなし
さよ御前ともくつなるすこしたからをとらせよ
ちゝとしてうきをおもひさみしむものおもひ
うまれて御らんさしくまつしふく
の殿はいてたく給ふへき家もなくせうもん佛
とよくしくへはまいらせられまいらせし
よひよおもひてふきしんわうらんのくはい
とさゝせんさんのきんしかおもひのふい
きやう身をこゝのゑにわかれ給ふをる
しまひちよ御身つゝもうちあさ



夕暮にみやこをしのひて いとゝこひしけれは
とよみける
いにしのよすてゝきあのはなは
まつらくれいこめしりつ
うわたまみひとまきいつり
ろうきゝてもふしよ

かくちゐのすゑとのハめのとゝともにわきまへのひ
てゐしこのちぎりとおもひてこゝひよるひく
おもひへきよしをつゐのみのちぎりやとしおもひぞ
あはれへしきとおもひつゝむつかしてあはれともし
月をみてかしきつみかとひめきみをよろしく
あくまるゝかへとてこわかけりつゝしはなき
はちまうりこれてはゝうからうちいゐのまいをす
まさわりへしねりまゐくるけにうちさしてゝく
あまおりてさましくのことゝとかすつゑは
いましかゝさりんかりけるのせなかうかう

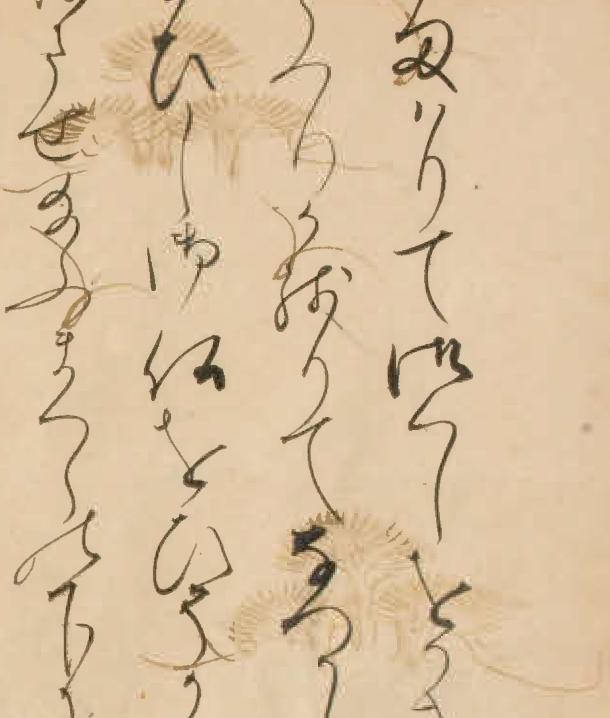
せめひにけるころすゑとのハめのるかさよし
のつく八重のおもちかとこけりしにけうふとも
よそれめつるあけぬるいとまゐりしかしの
うれしさのいはるゝ書さめちらしてたらせ
めでたくれしおうしゐ文めのいさかつゝいまや
ひめきみみおのもとておきさせやりもやさのと
るきおりていさ父母のいふらうつまそてもち
しはるのなもあるへなよかちさらせたまさる
ゆきはしまわとたかいめつあるくかうかひ
くうとあけまとの御つゐにたさるとのめうてけ

かへりてゆくしときなさてかくよせ人の袖
のうちにおりてあかしさゝきわたしけせ
なひしゆゑもとひよりしときさ給へつい
給させまゐらすにつまさまとはわかれし
たまのうへありさまはれしのうへやとて花よそひ
ろきみ人給つゝはこゝろのうちもとゝめしうせ
なのひて

つまも給よ
なりひらてん
なりけり

あかさく
ましてみよの
こゝろ

こゝろせ給ひわけてはうつくしくなれしかせ
給へつゝやといはるしくおもひわくさもりた
まうて



110X
410
2